光源氏の物語 Q&Aハンドブック

東原伸明＋髙橋美由紀 編著
Higashihara Nobuaki　Takahashi Miyuki

武蔵野書院

目次

はじめに――古典という「知」の遺産活用のために…5

Q1 『源氏物語』の「源氏」とは何でしょうか?…9

Q2 『源氏物語』の「物語」とは何でしょうか?…15

Q3 『源氏物語』を読むために、「作者の伝記」を知っている必要はあるのでしょうか?…22

Q4 「いづれの御時(おほむときに)か…」と「桐壺」巻頭を語っているのは「紫式部」ではないと聞きましたが、ほんとうでしょうか?…25

Q5 光源氏が女性と関係することと、彼の立身出世とはどのように関わりますか?…30

Q6 桐壺の更衣は、なぜこれほどまでに帝から偏愛されたのでしょうか?…34

Q7 「葵」巻車争いの場面は、「誰」の立場から叙述されているのでしょうか?…40

Q8 光源氏が行った「須磨」・「明石」とは、どんな場所だったのでしょうか?…49

Q9 四季の町で構成されている六条院の女主人たちの序列はどうなっていますか?…60

Q10 「野分」巻において、夕霧の視点から物語が叙述されるのはなぜでしょうか?…63

Q11 三瀬川(みつせがわ)の「俗信(ぞくしん)」と「極楽往生」とは、どう関わるのでしょうか?…72

Q12 「幻」巻で、光源氏は亡き紫の上に向け独詠します。彼女の魂はどこにあるのでしょうか?…80

Q13 続篇の舞台「宇治」は、どのような場所として描かれているのでしょうか?…85

Q14 宇治の「神話的な時空」と「反逆者八の宮」とは何でしょうか?…91

Q15 続篇宇治十帖の自然描写と「感覚の論理」とは、どのようなものでしょうか?…96

Q16 『源氏物語』から作者紫式部の思想や嗜好を客体的に抽出することはできますか?…105

Q17 光源氏の「モデル」は、藤原道長だという説は正しいでしょうか?…110

Q18 「通い婚」という婚姻形態は無いという話を聞きましたが、ほんとうでしょうか?…114

Q19 光源氏の容姿の美を、どのようなものとしてイメージしたらよいのでしょうか?…118

Q20 『源氏物語』を現代語訳で読むと、なぜこんなにつまらなくなってしまうのでしょうか?…124

Q21 『源氏物語』は現代語訳で読んでも「誤読」の余地はないという意見を聞きましたが、ほんとうでしょうか？……131
Q22 紫式部や清少納言は地方の伝説や伝承を、どのように取り込んで作品を創り出したのでしょうか？……139
Q23 紫式部自筆の『源氏物語』が現存しない合理的な理由は何でしょうか？……154
Q24 物語研究において「話型の果たす役割」とは何でしょうか？（その1）……160
Q25 物語研究において「話型の果たす役割」とは何でしょうか？（その2）……167
Q26 物語研究において「話型の果たす役割」とは何でしょうか？（その3）……183
Q27 近代以前の注釈書に対してどういう姿勢で臨めばよいのでしょうか？……201
Q28 古典文学研究の「在（あ）る思考」と「成（な）る思考」とは何でしょうか？……224
〔解説〕源氏物語をどう読むか――池田亀鑑・三部構成説の紹介……229
おわりに――教養教育（リベラルアーツ）としてのQ&A……239
附：主婦と学生・院生生活両立の日々――髙橋美由紀のプロフィール……251

はじめに――古典という「知」の遺産活用のために

東原伸明

『源氏物語』のような古典文学を読むことに、どのような喜びがあるのでしょうか。

この書は、NHKの大河ドラマ「光る君へ」が放送されるという情報を得た時点で、企画されました。「令和」への改元のときもそうでしたが、私ども古典文学に携わる研究者らは、常に〈こうした機会に〉と、考えておりました。昨夏、物語研究会で（そんな研究会があるんですよ！）発表をした折に、業界の「若い仲間たち」が、「光る君へ」のバブルを期待し、「たぬきの皮算用」、『源氏物語』周辺の啓蒙書を出版する（既にしている、していた）という情報を得ました。「光る君へ」の内容が、どのようなものになるのか？まったくわからない状況で、とにかく、日本古典を広めるための千載一遇の機会を逃してはならぬと、業界の人たちは皆、思っていたことでしょう。世の中は進歩しているのか？逆に退化しているのか？今年六十五回目の誕

生日を迎える私ですが、よくわかりません。確実にわかっていることは、日本人の人口がどんどん減っていることと、比例して本を、特に古典を読まなくなっていることです。日本の遺産はたくさんありますが、その一つである古典文学を「読まなくなっている」、というよりも「読めなくなっている」。この先、「古典文学を読むため」には、それなりの下準備が必要ですが、今や「宝の持ち腐れ」状態なのかもしれません。

ところで、大阪の街を歩いていると、特に難波のメインストリートや日本橋（にっぽんばし）で気が付くと、周囲に日本語を話す人は皆無。〈果たしてここは日本なのか？〉と、少し心細くなります。道頓堀は「出世地蔵」に隣接する「庵（いおり）の梅」という居酒屋さんへ。お客の半分は、鮪目当ての口コミ外国人観光客。主人は「ポケトーク」片手に喜々として注文を取り歩き、「佐伯さん」という凄腕の板前さんが一人で、鮪の鮨を握り、馬刺・鯨刺、てっさを引き、てっちりの支度をする、たった一人で、次々と注文をこなしてゆく、壮観な店。父・母・娘・息子という家族構成の台湾人親子、コーラで鮪の鮨を食べる、小学生と中学生の英国人姉妹とその両親……。

ここでなぜ、こんな話をするのかと訝しむ方もあるかもしれません。しかし、これは今の、あるいはこれからの、日本の「象徴的な風景」なのかもしれない。先に私は、「日本人が日本の古典文学を読めなくなっている」と書きました。それに反して、たしかに増えているものがあ

ります。それは、母語が日本語ではないけれど、日本の古典を愛し、文学や文化を専門に研究するために、日本を訪れる外国人たち。

私の元同僚のローレン・ウォーラーさんは、『万葉集』を愛するアメリカ人研究者で、挫折を乗り越え、めでたく昨年イェール大学で博士の学位を取得しました。日本で日本人に向って『万葉集』のすばらしさを説いて広めてくれています。

また、語学の達人で、私などより遥かに格調の高い日本語の文章を綴るジョエル・ヨースさんは、ベルギー人の日本思想史・日本文化史の研究者。高知県立大学の教授で、昨春「自由民権」の資料を探して長野県の安曇野市を訪れ、泊まった宿で「大雪渓」（池田町）という日本酒のうまさに開眼したという、本人から聴きました。

もはや、日本語を母語とする旧日本人が古典文学を楽しむ時代は、過ぎたのかもしれません。しかし、大河ドラマの放送開始とともに、ネット空間では確実に、『源氏物語』周辺の誤・情報が、氾濫しています。原文で読んだことも無いくせに「知ったかぶり」はやめてほしい。「知」の遺産の活用のために、本書を読んでほしいと願います。見出しの「Q（クエッション）」は、高知県立大学（前身の県立高知女子大学）・同大学院の授業で、過去に受講した学生から寄せられたものに（解放授業の聴講者を含む）、この度の刊行にあたり、頭をひねって追加しました。執筆分担は、各

項目の末尾に、（東原）・（髙橋）と明記してあります。「はじめに」と「おわりに」は東原が、「解説」と「附」は髙橋が担当しました。

Q1 『源氏物語』の「源氏」とは何でしょうか？

A 『源氏物語』の「源氏」とは何でしょうか。光源氏は、「源光（みなもとのひかる）」というような名前ではありません。「光る君」というのがニックネームなのですが、実のところ、本名はわからないのです。

そこでまず考えてみなければならないのは、「源氏とは何か」ということです。ここでいう「源氏」は普通名詞で、固有名詞の「源氏」・「平氏」（＝平家）の「源氏」を指してはいないということです。

「源氏」とは何か？定義を試みるならば、「元皇族で、臣籍（しんせき）に降下（こうか）した大貴族の姓（かばね）」ということになります。天皇から姓を戴くので、一般には「賜姓源氏（しせいげんじ）」とも呼ばれます。著名なところでは嵯峨天皇が五十人もの皇子・皇女を臣籍降下しており、嵯峨天皇のお子さんなので、「嵯峨源氏」などと呼ばれています。

皇女の場合は結婚することによって民間に下る結果となるので、「降嫁（こうか）」と書きます。要するに源氏とは、「皇族」から「民間人」になること。朝廷の臣下になることなので、そのしるしとして、姓が必要になり、併せて納税の義務も生じるというわけです。

対して皇族は皇統譜に名前だけが書かれていて、臣下ではないので姓はありません。皇族でいることは「皇位継承権」、つまり、次の天皇となる資格と順位を有していることを意味します。「源氏」として、臣籍に降下し民間人になってしまった時点で、その資格は喪失します。その代わり政治的には、自由な存在になります。現在でもそうなのですが、皇族は政治に関与することはできません。だから、名誉職に就くというかたちをとって朝廷から俸給を賜ります。現在でもたとえば、「日本赤十字社の総裁」などといった感じです。

さて、臣籍降下をした人が「源（みなもと）」という姓を名乗った一番最初は、「嵯峨源氏」からだそうです。それ以前に臣籍降下した人々は、「みなもと」を名乗ってはいないということです。

（奥原敬之「嵯峨源氏」『天皇家と源氏　臣籍降下の皇族たち』吉川弘文館、二〇二〇年）

「嵯峨源氏」以前、臣籍降下した人々の姓は、藤原・橘・清原・在原・春原・伏原・長谷・文室（文屋）・広根・大江・弓削・夜須・長岡・岡などです。

たとえば奈良時代の例、第三十代敏達天皇の六世の孫・葛城王は、天平八年（736）十一月十一日に臣籍降下して、橘諸兄となっています。また、第四十代天武天皇の四世の孫・和気王・細川王の兄弟が、天平勝宝七年（755）六月二十四日に臣籍降下して、どちらも岡真人となっています。

さらに延暦六年（787）二月五日、第五十代桓武天皇は、異母弟の諸勝親王を臣籍降下させて広根諸勝と賜姓し、自身の皇子の岡成親王を同様に臣籍降下させて、長岡岡成としています。どちらも天皇の皇子ですから、これは二代目の臣籍降下の例で、二世の源氏ということになります。

平安時代になって、「嵯峨源氏」以降は、臣籍降下した人々の多くが姓として「源（みなもと）」を名乗ったので、通称的に「源氏」と呼ぶようになったものと思われます。しかし、なぜこれほどまでに「源（みなもと）」という姓には人気があったのでしょうか。

奥原敬之によれば、嵯峨天皇が「源」を賜姓したのには、以下の理由からのようです。中国の『魏書』の一節「源賀伝」の挿話に、魏朝の世祖が同族河西王の子・賀を臣籍降下させ西平侯龍驤将軍に任じた際に、「卿と朕とは、源を同じうす。事に因りて、姓を分かつ。今より「源」を、氏とすべし」として、賀に「源」を賜与したというわけです。

もう少し説明を付け加えると、近世の国学者・谷川士清が『和訓栞』で、「みなもと、源をよめり。水元の義なり」としています。同じく近世の神道家・玉木正英も